

「表現愛」の人間学—木村素衛教育学における身体論の系譜

門前斐紀

要約

本研究は、京都学派の美学・教育学者木村素衛（1895-1946）の教育学を身体論に沿って読み解き、「表現愛」の人間学として描出する試みである。その作業を通し、木村教育学の論理が探究する「表現」「形成」「作ること」の内実を捉え、今日の教育における問い、とりわけ芸術・表現活動をめぐる学びや創造性について考察することが目的である。

木村は「表現愛」という概念を、個々人が内面に抱く愛情や愛着という意味合いではなく、人間が「身体的存在」として現に生きている世界構造、つまりは人間にとっての世界の成り立ちとして提起した。そして、教育という営みを考えるには、「歴史的社会的存在」として現に生きている人間の在り方を究明する「人間学」に基づく必要があると説いた。本研究は木村のこのような立場を踏まえ、身体論に沿って「表現愛」思想を読み解く試みを「表現愛」の人間学と呼ぶ。

本研究の構成は以下の通りである。

第Ⅰ部 木村素衛における身体論の系譜—「表現愛」の人間学の3つの視点

第Ⅱ部 「表現愛」の人間学が臨む〈文化-教育〉の創造的連関

第Ⅰ部では、木村の思想のなかに、身体論がいかに芽生え、どのような論理展開を辿ったのかを明らかにすることが主な課題となる。ここでは、第2章、第3章、第4章の各章を通し、「表現愛」の世界構造における人間の在り方を、3つの身体論の系譜—「ポイエシス＝プラクシス」という身体的行為の原理、身体が根差す普遍的地平としての「歴史的な自然」の概念、技術的身体性の内奥に語られる美的な動勢としての「情趣」—から照射する。

まず第1章では、木村の思想の萌芽を「表現的制作人間の人間学」として把握する。ここでは、1931年より推敲が重ねられ思想の転機となったと言われる論文「一打の鑿」の芸術制作（ポイエシス）論と、それと合わせて執筆された

論文「意志と行為」（1932年）における道徳的社会的実践（プラクシス）論とを詳細に辿る。

そして第2章では、後期教育学で身体的行為の原理として提示される「ポイエシス＝プラクシス」を、「表現愛」の人間学の第一の視点として提示する。本章では、前期思想においては上記2つの論文に分けて考察されていた両原理が、一つの術語として示されるに至る論理の背景を読み解くことが課題となる。「ポイエシス＝プラクシス」の「＝」は、等号を意味するのではなく、両原理が区別以前から区別を成しつつ生起する動勢を示すことが先行研究で指摘されている。ここでは、「ポイエシス＝プラクシス」原理の成立背景に、1930年代初頭の田邊元による身体論と、1935年頃から際立てられる西田幾多郎の「行為的直観」の議論からの影響を読み取る。そこで明らかとなるのは、木村教育学の「ポイエシス＝プラクシス」が、ポイエシス的身体性としては対物質的対環境的な創造的な作用、プラクシス的身体性としては対人格的な人間的社会的実践の動きを捉えている点、そのうえで「＝」の記号により両者が相乗的に依拠し合う作用を把捉している点である。

続いて第3章では、「表現愛」の人間学の第二の視点として、京都学派に共有される用語である「歴史的な自然」の概念に着目する。また本章では、「表現愛」という術語が提起された代表的論文「表現愛」（1938年）を主な手がかりとして、木村の技術的身体論や概念の詳細な意味、「表現愛」における主体性の捉え方、「愛」の原理などについて詳しく理解する。木村の「歴史的な自然」理解には、西田の教育論から引き継いだ「天地の化育を贅く」という『中庸』の一節が反映されている。ここでは、木村が「歴史的な自然＝天地」の「イデア」を「先取」する身体性を説くことで、身体的行為の只中に、自身が定義するところの「内に包み、そこに於て生みそこに於て育てそこに於て営ましめ遂にそこに於て死なしめる歴史的な自然」という普遍的な地平が根本的に編み変わる側面を捉えていることを示す。

そして第4章では、木村の身体論を特徴づける第三の視点として、中期の美学論文「形式と理想」（1940年）に提起される「情趣」の概念に注目する。木村によれば「情趣」とは、分別知や意欲的意志を「内に否定」し切った、「人間性そのものの感情に於ける絶対的肯定」の作用であるという。本章では、技術的

身体性の内なる美的動向としての「情趣的主体性」に光を当てることで、木村教育学のなかに打ち拓かれた美的人間形成論を探る。

第Ⅱ部では、木村教育学の基本的構造を「文化」と「教育」との創造的連関一本研究では〈文化-教育〉と示す一として掴み、その論理展開のなかに、第Ⅰ部で「表現愛」の人間学として象った身体論の系譜を辿る。そうすることで、木村が教育学の俎上に載せた技術的身体論の詳細や、そのような議論により提起される問題や課題性、また思想に遺された難点や今日的意義などについて考察する。

まず第5章では、木村が自身の教育学の教育原理や方法論を論じるうえで機軸とした技術的身体論について詳しく整理する。主な論点となるのは、技術的身体を育む教育原理としての教材論と、「追形成」と称される教授法の議論である。

それを受け第6章、第7章では、技術的身体性を育むための原理と方法論が、木村教育学の具体的な議論のなかでいかに位置づけられているのかを明らかにする。まず第6章では、木村教育学のなかで論理がとくに矮小化されたと批判されている、「教育愛」論を検討する。「表現愛」の世界構造に語られる木村の教育愛論については、理論研究の立場から、「表現愛」と「教育愛」が混同され、歪曲した議論が示し出されていることが指摘されている。本章は、教育愛論の限界点を、木村が提起する「敬」の概念のなかに読み取る。教育愛が「敬」一教師の側の「権威」と子どもの側の「敬服」との連関一を原理とするとの木村の議論では、「愛」の働きは個人の内面性に帰属されており、論理は確かに「個人的自覚の先験的構造」を論究することを旨とした木村教育学の本来のかたちから逸れている。そこで本章では、試みに「表現愛」における教育愛論に身体論を接続することで、新たな展開が示し出される可能性を指摘する。

続いて第7章では、木村教育学の技術的身体論が後期教育学においていかに転調され、どのような論点や課題を示し出すことになったかを探る。ここでは、とくに晩年の国民教育論の鍵となった「世界史的国家」論や、その枠組みで改めて提起された「世界史的表現愛」概念、そしてそうした議論を以て木村が教育学の課題として力を入れた〈国民文化-国民教育〉の創造的連関構造などが主な焦点となる。以上を検証することにより、本章では「世界史的表現愛」とい

う世界構造が、国際的に「離身的延長」される「道」の概念の下に技術的身体論を論じ直していることが明らかとなる。そのように、晩年の身体論が多様な文化の「媒介的創造的発展性」の探究に向けられている点を確認されることで、木村の晩年の技術的身体論—「世界史的國家の技術的契機」の「形成的自覚的尖端」としての技術的身体論—は、一見されるような國家至上主義的な文脈にはなく、むしろ相反する絶対的に異なる存在の仕方を、世界史的規模で保ち間主体的に育む論理を提起していたことが示されるだろう。

最後に終章では、本研究が「表現愛」の人間学として提示する「身体的存在」の基礎構造を、図式化することを試みる。そして、学校教育における芸術・表現活動を舞台として、そのような図式から「身体的存在」にとっての学びを問い直すことが今日の教育に対しいかなる意味をもつのかを論じる。ここでは、木村と長らく親交を続け晩年まで師事した糸賀一雄の福祉思想を参照としながら、「表現愛」の人間学が示す「身体的存在」の構造を踏まえることにより、学校における学びの先にいかなる社会生活が見通され得るのかを考察する。以上、木村教育学を「表現愛」の人間学として紐解くことにより、「表現」「形成」「作ること」の創造性は、単なる自己実現や自己表現の文脈を超えて、個々人の「身体的存在」としての布置を活かす無限の試みとして描き直される。